

修士論文（要旨）

2023年1月

初級日本語教科書における条件表現の導入について
ーナラの用法と提示方法を中心にー

指導 茶谷 恭代 准教授

国際学術研究科

国際学術専攻

グローバルコミュニケーション実践研究学位プログラム

221J1004

李 雨珈

Master's Thesis(Abstract)

January 2023

Conditional Expressions Introduced in Japanese Language Textbooks for Beginners
: Focusing on NARA Usages and Presentation Methods

LI YUJIA

221J1004

Master of Arts Program in Global Communication

Master's Program in International Studies

International Graduate School of Advanced Studies

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Yasuyo Chatani

目次

1. はじめに.....	1
1.1 背景.....	1
1.2 研究目的.....	2
2. 先行研究とその問題点.....	2
3. 研究の対象と方法.....	10
3.1 コーパスによる実例分析.....	10
3.2 初級日本語教科書.....	11
4. ナラの実例分析.....	12
5. 初級日本語教科書の調査と分析.....	19
5.1 導入される順序と用法.....	19
5.1.1 『みんなの日本語』（初級Ⅰ・Ⅱ）.....	19
5.1.2 『大地』（初級Ⅰ・Ⅱ）.....	21
5.1.3 『げんき』（初級Ⅱ）.....	22
5.1.4 『できる日本語』（初級・初中級）.....	24
5.1.5 『まるごと』（初級1A2 りかい・初級2A2 りかい・初中級A2/B1 りかい）.....	28
5.2 提示の方法.....	29
5.3 教科書の問題点.....	30
6. 初級日本語教科書におけるナラの導入についての提案.....	31
7. 今後の課題.....	33

参考文献

現代日本語には、ト、バ、タラ、ナラの4つの形式による条件表現があり、日常会話でも公的場面でもよく使われている。しかし、意味が近くて置き換えられる場合もあれば、置き換えられない場合もあり、学習者にとって習得が困難である。学習者が初級の段階から混同せずに4つの形式の使い分けができるようになるためには、日本語教科書においてそれぞれの条件表現の導入される用法、順序と提示方法は重要であると考えられる。

これまでの条件表現についての先行研究には、ト、バ、タラ、ナラの異同、用法の種類、主節のモダリティー制約、習得状況などの分析が多く見られるが、教科書での導入に関する研究はまだ少ない。特にナラの導入については、初級から中級にかけて教科書での扱われ方がさまざまであり、学習者の混乱を招く可能性のある提示のしかたが見られ、ナラをどう提示するかはまだ検討の余地があると考えられる。また、前田直子(2020b)、奈良夕里枝(2021)などの先行研究が教科書におけるナラの導入案を提示しているが、他の条件形式との関係の中で具体的にどのように導入すべきであるかについてはまだ十分な提案がなされていない。

そこで、本稿は「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」を対象にナラの実例を収集し、ナラの用法の全体像および使用実態を把握する。次に、5つの初級日本語教科書でナラが導入される用法、順序、提示方法を調査して教科書の問題点を明らかにする。そのうえで、初級日本語教科書におけるナラの導入すべき用法、順序、提示方法を検討し、使い分けの視点から一案を提示した。

実例分析を通して、ナラの用法のうち、仮説的用法と提題的用法の使用頻度が高いこと、また、ナラには確実にト、バ、タラと共通しない独自の用法と自らのニュアンスが存在することを確認した。ナラの使用においては、仮説的用法がもっとも多く、73.47%を占める。その中には他の形式と置き換えられるものもあるが、置き換えられないものもある。また、提題的用法も比較的多く見られ、15.51%を占める。提題的用法は仮定性・条件性が弱く、主に前文脈の主題を受け取る機能を果たす。接続詞的用法は6.53%を占める。接続する形式はある程度に定着しているが、ト、バ、タラほど多くない。事実的反事実の用法は2.04%を占める。この用法は、書き言葉のコーパスでの割合が少なかったが、ナラのみが使われる用法で、日常会話においてはよく耳にする表現である。

教科書の分析によっていくつかの問題点が明らかになった。まず、『みんなの日本語』『大地』は初見のナラがバの名詞・ナ形容詞の接続形として扱われている。学習者がそのように認識することによって、ナラしか用いられないタイプの仮説的用法や、事実的反事実の用法などを学ぶ際に学習者が意識できない可能性がある。さらに、『みんなの日本語』ではナラをバの名詞・ナ形容詞の接続形として提示した後に、ナラの提題的用法も同じ課で導入することになるため、学習者がナラの使い方の区別を適切に理解できない可能性が大きい。また、提題的用法の例文は前文脈が示されていないまま提示されていると、仮説的用法に移行する可能性がある。『まるごと』は仮説的用法の「動詞+ナラ」を積極的に取り上げたが、すぐ後に仮説的用法のバが導入され、さらにナラがバの名詞・ナ形容詞の接続形として扱われ、学習者はこの順番で習うと、「動詞+ナラ」と「動詞+バ」の使い方を混同する可能性がある。

以上の実例分析と教科書の問題点に基づいて、本稿ではナラの導入の一案として次のような提案を行った。初級ではまずナラの〈提題的用法〉を前文脈がある名詞文で最初に導入し、他の形式の仮説的用法のあとにナラしか用いられないタイプの〈仮説的用法〉を導入する。その際、教師はナラの特徴を強調して説明する必要がある。次にバの仮説的用法と反事実的用法（～バいいのに／～バよかったのに）を導入した後に、初中級の最後あるいは中級で、動詞文でナラの〈事実的反事実用法〉を導入する。学習者が混同せずに使い分けができるようになることを目指し、ナラのこれらの用法を導入することを提案した。また、ナラが単独の文法項目だと学習者に認識させるために、バの名詞・ナ形容詞の接続形はナラではなく、「であれば」で提示する方法、あるいは初級の段階ではバの名詞・ナ形容詞に接続する例文は提示しない方法も考え得る。

今後の課題として教科書の例文中級まで、後件に注目してト、バ、タラ、ナラのそれぞれの特徴をさらに検討していきたい。

参考文献

- 稲葉みどり (1991) 「日本語条件文の意味領域と中間言語構造—英語話者の第二言語習得過程を中心に—」『日本語教育』75,87-99 日本語教育学会
- 笠井康代 (2001) 「日本語の条件節に関する研究—「と」「ば」「たら」「なら」の教科書分析を中心に—」『日本語文化研究』(4), 13-27 比治山大学日本語文化学会
- 高橋太郎他 (2005) 『日本語の文法』ひつじ書房
- 高梨信乃(1995) 「非節的なXナラについて」仁田義雄編 『複文の研究(上)』くろしお出版 167-187
- 奈良夕里枝 (2021) 「日本語教育の現場における条件表現ナラの効果的な提示のしかた——話し言葉と書き言葉におけるナラの用法分類から——」『人文』19号 39-52 学習院大学人文科学研究所
- 前田直子 (1995) 「バ、ト、ナラ、タラ—仮定条件を表す形式—」宮島達夫・仁田義雄編 『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版 483-495
- 前田直子 (2007) 「順接条件節「なら」の接続形態」『現代日本語研究』9, 23-39
- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版
- 前田直子 (2020a) 「第8章 条件表現」井島正博編『現代語文法概説』朝倉書店 89-104
- 前田直子 (2020b) 「条件表現4形式使い分けルールの簡略化」『日本語文法』20(2), 40-56 日本語文法学会

<教科書・教材>

- 『みんなの日本語 初級Ⅰ 第2版本冊』2012年 株式会社スリーエーネットワーク
- 『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版本冊』2013年 株式会社スリーエーネットワーク
- 『日本語初級1 大地 メインテキスト』2008年初版 株式会社スリーエーネットワーク
- 『日本語初級2 大地 メインテキスト』2009年初版 株式会社スリーエーネットワーク
- 『初級日本語げんきⅡ 第3版』2020年 株式会社ジャパンタイムズ
- 『できる日本語 初級 本冊』2011年初版 株式会社アルク
- 『できる日本語 初中級 本冊』2012年初版 株式会社アルク
- 『まるごと 日本のことばと文化 初級 1A2 りかい』2016年 株式会社三修社
- 『まるごと 日本のことばと文化 初級 2A2 りかい』2016年 株式会社三修社
- 『まるごと 日本のことばと文化 初中級 A2/B1』2016年 株式会社三修社